
太陽はお月さまに恋をする

水奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽はお月さまに恋をする

【Nコード】

N4111W

【作者名】

水奈

【あらすじ】

母なる下の大地^{パンゲア} 無数に広がる大小の上の浮島^{ヴァイトル} 太陽神の子供たちが暮らす「下」に月神の子供たちが生きる「上」は存在を脅かされていた。

下からの侵略にひとり立ち向かうのは上に唯一存在する元日本人…
…もとい月神の半身である魔女。返り血浴びながら今日も元気に竜でも召喚して戦います

そんな壮絶なるお勤めを今日もこなして住処に帰ってくると……

「お前、誰だ？」 「……………」 「……死んだふりが通用できるの

は熊だけだが？」

大怪我を負った太陽を拾いました――。

正体不明？（多分皇子）な謎の青年と歴代最強元日本人魔女が出逢ったら何が変わる？ 少女の魂と青年の心と世界が変わります。（

※特に青年の想いとか思いとか重いか） 異世界トリップモノの恋愛ファンタジー目指して頑張ります

プロローグ（前書き）

うわゝ なんか緊張する……

プロローグ

この表現しようもない安心感なんだろう

なにもない闇色の世界に寝転がって空に手を伸ばし、少女は思う

ぼんやりした頭 普段なら恐怖を感じるほどの黒色の世界にも、今の彼女にとってはひどく安心できる場所に思えた

伸ばしたことによって視界に入ってきたそれは、自分が今まで持っていたものとは随分違って見えた

今ここに存在するのは本来の自分じゃない。

そう少女は直感する

違和感まみれの身体、違和感まみれの世界に彼女はようやく意識を覚醒させ、激しく混乱した

ここはどこ？ 私はどうかなってしまった？

少女は懸命にこの暗闇で目を覚ます前のことを思い出す

しかし思い出せるのはいつものように家に帰宅し、家でのもんびりくつろいで窓から目の前に広がる海に沈む夕日をぼんやりと眺めていたという、なんてことのない少女にとっての日常の習慣だった

———いや、その夕日に何かを視たような気がする

それが何だったのか、少女は思い出せない

まるですっぽりそこだけ頭から抜け落ちたかのように、へ何かを視た〳〵という記憶の残像は残っているのに肝心の記憶だけが消されたような……そんな感覚。

少女はそのことになぜか無償に悲しさを覚えた
大切な約束を不慮で破ってしまったような気がした

哀しみが混乱よりも上回り、今度は耐えがたい苦しみが少女の身体を襲う

伸ばした腕をおろし、今度は両腕で自分を抱き込み、言いようのない罪悪感で震える身体を丸めた

と、そこで少女は最初の違和感を思い出した

いや、正確に言えばいつもと違う身体に違和感を覚えたのではなく、あまりにも自分に馴染み、なにか満たされたように感じた身体に違和感を覚えたのだ。

ここにある自分は今までの自分ではない

それはこの暗闇でも少女が思えるほど確かな感触だった
しかし、これはまたなんとも複雑な……………

今あるこの身体のほうが、本来の自分ように思えたのだ

おかしい話だ。今まで20年近くあの身体で生活してきたのに、おそらくついさっきなっただけにこの身体のほうがより自然に、自分の魂が溶け込む感触がする。

――あぁ、そうか

そこで少女はなんとなく悟った

これこそが、私が最も欲していたものだったのだと

この暗闇に放り込まれる寸前まで、彼女はなにかわからない喪失感があった

夕日……太陽と、空に見える薄ぼんやりとした月を見てるとなぜかそんな喪失感が少し薄れる気がして、事あるごとにいつも空を見上げていた。

だからこそ身に付いた夕日を眺めるという習慣

だが今現在は、それ以上の充実感があった。

それはここが、本当の自分のいるべき場所なのだという確かな確信だった

そうか、そうなんだ――――

わかった瞬間、自然と笑みが浮かぶ

少女は笑顔のまま顔をあげ、一面の広がる闇を見上げた

「……………ただいま。」

眩いた瞬間、闇が音をたてて割れて碎け散った。

代わりに神々しいほどの白い光が一瞬にして少女を飲み込み、質量を増して膨れ上がる

その眩しさに少女は思わず目を瞑ったが恐怖は微塵も感じなかった

心の奥底からこみ上げる満足感にただ身を任せ、自然と薄れていく意識にあらがうことなく身体から力を抜く

心を開いた小さくて大きな穴が、まだひとつだけ残されていることに気づかないふりをして。

プロローグ（後書き）

は、はじめまして

初めて完全オリジナルの作品を世間様に公表します（汗

風呂場とかトイレとか踊りながらとか真っ暗な部屋とかで考え（↑妄想）暖めてきたものを書きたいと思います。

しょっぱなからなんか違和感とか安心感とかく感という表現が多数連発されてるような気がしなくもないですがまあそこは御愛嬌W↑拙くお目汚しな文章になると思いますがどうぞよろしく

それなりに離れてるからいいんです。近すぎると熱くて死ぬんだから（前書き）

すごく、今トイレ行きたいです……↑ここで書くことではない

それなりに離れてるからいいんです。近すぎると熱くて死ぬんだから

人生なんていつなにが起きるかわからないものだ。

穏やかな昼下がり

はるか遠く、真上の空に輝く太陽を見上げながら、里沙ことリーシヤはそう思った

生まれたときから平凡に、可もなく不可もなく人生を送ってきた。約3200gでこの世に生を受け、生後3ヶ月で首が座り、6ヶ月で初めてのお座りをして1歳の誕生日頃に「まあまあ」「ぱあゝぱあ」となるともまあ舌っ足らずな声で喋れるようになった。

至って平均的な育ち方をした赤ん坊だったのだと思う。深くそう思う
体重も身長も脳の発達具合も他の子とのコミュニケーションの取り
方も教科書に書いてあるような模範的な平均値のそのまんま。

公園で遊んでる時母親が他のママさん友達と井戸端会議でも

「うちの子、歩いてもうすぐ転んだりして歩き方が安定しないのよ。
もう3歳になるのに」

「あら、それは大変ね。うちの子はね、最近通わせ始めた塾で飲
み込みが早いなんて先生に褒められちゃって、まだ4歳なのに割り
算の勉強を始めたのよ！ 将来有望だわ」

「まあでも聞いてよ、うちの子なんて女の子のお友達からモテまく
ちゃってこの前のバレンタイン、10個もチョコもらってきてたの
よ」

なんて不満、自慢話とは一切縁がなかった

「あらそうなの？ 大変なのね」

「すごいわ、そんなに早いうちからお勉強して。うちの子にも見習

わせたいわ」

「まあ、それじゃあこれからおつきくなったら彼女さんとかすぐにできそうね」

とまあ、適当にそんな相槌を打つだけで、自ら率先して我が子について話すということもないくらい

自分には思わずお涙頂戴な程身体が弱くもなく、親がく○んとかく○マハに毎月糞高い月謝を払ってまで通わせたくなるほど頭が良かったわけでもなく、街を歩けば子役にスカウトされるほど目ん玉飛び出るような容姿もなかった。

せいぜいはまあ可愛いかな程度、しかもそれは親戚のおじさんおばさんが姪っ子を可愛がる時に言われるようなニュアンスだったし、まあちっちゃい子は誰だって「可愛いね」くらい言ってくれる。

そりゃそうだ。5歳児に「キミブサイクだね」なんて言う奴いるか？

否

そんなくらいの年の子はみんな似たり寄ったりな顔つきではないか

成長してアルバムなんか振り返ってみれば

『あー、あの頃のアンはこうんなちっちゃくて可愛かったのにな
』

と大体の子供は親にそう残念そうな顔をして溜息をつかれるじゃないか

総じて、“ちっちゃい子は可愛い” これ、人間の刷り込み要素

可もなく不可もなく

平平凡凡

『里沙ちゃんはみんなよりお姉さんだね。偉いね』

幼稚園でガキ大将と言われていた子とおもちゃの取り合いになりそうだった時、そのおもちゃを譲って言われた先生の言葉が里沙の最大の褒め言葉

ただ単にいざこざが起きるのがめんどくさかったただけなのだが。

それから幾度もなく知り合いの大人から言われるのは

『里沙ちゃんは大人しくてお姉さんらしいね』

この一言に尽きる

先に言っておくと里沙に妹、弟はいない。
ついでに兄妹と呼べるような存在はいない。つまりはひとりっ子である

だが他人から見ると里沙は少々年のわりに冷めた子だったようだ。

小学生ごろになると女の子のほとんどがハマる某少女雑誌『ち○お』
なんかにまっとく興味は示さなかった。

異様に目がでっかく、顔の半分以上が目というあの強烈に人間として
大変おかしい絵面が気に食わなかったんだろう

他にも毎月買わなきゃいけないめんどくささなどもあったが

代わりに漫画は漫画でも低学年のころから図書室で『はだしの○ン』
を読みふけり、若干7歳にして戦争反対！戦争反対！！ 持たず・
作らず・持ち込ませず！！と非核三原則を家で叫んでいたという

……変なところは熱かった。

閑話休題

ええとつまり

ここで言いたいのは自分がいかに平凡か、だった。

とある事情によりその平凡は1年前には木端微塵に切り刻まれ、過ぎ去っていつてしまったが、里沙はその中でも自分の平穏は守りきってきたつもりでいたし

あれだけ嫌っていた戦争をやるようになって、自分の信念だけは曲げずにいた

だから平凡さを失ってしまっても

「――――！……シャ……！！」

人間のように人間でないものになってしまっても、

「――――リ………シャ！」

己の妙に冷めた性格はあまり変わらなかったのに。

「リーシャってば!! 現実逃避しないで戻ってきてー!!」

.....。

.....。

はっ

「な、なに？ ルク。」

「なに？ じゃない！ 大丈夫！？
あまりのショックさに白目向
いてたけど！」

あまりの衝撃に頭が付いていかず現実逃避に走っていたらしい。頭
を振って「大丈夫だよ」と友に応える

「そ、それより、あいつなに!? さっきいきなり“空間歪み”から出てきたんだけど!!」

ようやく現実に戻ったりーシヤは、友の声を聞いて我に返った

「……………っつ……………う」

地面にうずくまっている“それ”に近づき、しゃがむ

ああ、忙しくも落ち着く平穏を、今まで必死に守ってきたのに

「――――どうしようか。これ」

つかの間の平穏が音を立てて崩れていくのを感じながら、リーシャはまるで死体のように動かない青年を人差し指で突っ突いた。

それなりに離れてるからいいんです。近すぎると熱くて死ぬんだから（後書き）

トイレには無事に行けました！

最低でも一週間に一度位の更新ペースでやっていきたいww
もう文才が欲しくてたまらないですorz

多分文章的にもおかしいところがいっぱいありますが、御容
赦おねがいします（涙

ちなみにち○おについては作者は根っからのち○おっこで、毎月楽
しみにしてました／／

そして大した才能もないのに○マハにも通いましたww

次からは本格的な太陽君と魔女さんの出会いで、お話スタートです

熊は黒髪を見つける

これは一体どうすればいいのだろうか――――。

リーシャは頭を抱えたくなった

目の前に倒れているのはひとりの男。

今日の仕事をこなし、くたくたになって帰ってきたリーシャの目に飛び込んできたのは、名前も知らぬ見ず知らずの男が人んちの庭の草花に血をまきちらしながら倒れていやがる光景だった

「―――お前、誰だ？」

とりあえず、聞いてみる

「……………」。

返ってきたのは無言。

「……死んだふりが通用するのは熊だけだが？」

「……………」。

でも無言。ずっと無言、終始無言。

つつん挿す指を引っ込め、今度はうーんうーんと考え込む

全身から血を大量に流し、無言なことから気を失っているであろう男はうつ伏せの状態で顔は見えなかったが、手や髪質からまだそこまで年をとっていないことが分かる。むしろまだまだ若いほうだろう

血まみれになった衣類は黒で統一され、ところどころそれは千切れて傷口をのぞかせ、肩から伸びているマントはズタズタに引き裂かれていたが、血に濡れていない場所を視る限り、相当高価で頑丈な生地で作られているようだ。「下」での身分は高い人間そうだ。

しかも、不思議なことに男が流したその血は地面に触れたとたん、そこの芽吹いていた草木が一気に成長し始めた。

いやな予感をひしひしと感じながら、リーシャは注意深く男を観察

する

時折痙攣を起こすかのように震えるその身体は、呼吸するにもつらそうだった

一言でこの男の今の状態を表すなら、『風前の灯』がきつとぴったりだな――――。

なんてちよつと物騒なことを上の空で思いながら、リーシャはとりあえず男をその場で仰向けの状態にした。

例え厄介事とめんどくさそうな臭いをプンプンと撒き散らすような男でも、一応は“命”である。深く突っ込むよりもまずは人命救助だ。

白の簡素な膝丈のワンピースが血にまみれるのも構わずに、リーシヤは男の頭と背中に手を当ててゆっくりと彼が呼吸を出来やすい体制にさせてやる……………すると彼女は眼を瞠った

「おっと……………これはまた——」

そこでようやく見ることできた男の顔は、目ん玉が飛び出るほど容姿の持ち主だった

怪我を負ってなおサラサラと輝く艶のある黒髪によく映えるほんの少し黄が入った肌、そして精悍なる顔立ちは大量の血を浴びていてもその輝きはまったく損なわれることがないように見えた

「誰だよこの美形さん……………」

ここまでくると驚きを通り越して呆れることしかできなかった。

イケメンもここまで来ると目の保養ではなく毒である。……いやこいつの場合は猛毒か。

異性に関心のないリーシャでさえもこの容姿には度肝を抜いた。昔のクラスメートの女子なら眩暈をおこして卒倒し、意識不明の重体モノのレベルであろう

一瞬作業する手が止まり、男の顔を凝視する

「これが本当のイケメンってやつか……。さすが異世界ファンタジー、チート感が半端ないな」

こちらの世界に来てから女はともかく、むせ返るような熱気を持った男たちなら腐るほど見てきたが、ここまでの人物はさすがに見たことがなかった

しかも黒髪だ。

極めつけのその事実にリーシャは眩暈を感じた

なんてこったい

こんなの見せられちゃあ私が今まで見てきた男どもはいったいなんだったんだ。

今まで 眼福眼福ゝ なんて思って見てた男たちもこの男の前では

足元にも及ばない
なんだか無性に日本人だったころの自分を張り飛ばしてやりたくな
った

目を覚ませ、世の中は広いんだ。上には上がいるぞ！と

ちょっと放心しながらも気を取り直し、リーシャはとりあえず治療
魔法を施すため服の釦をひとつずつ外していった。

いや、……………決してやましい気持なんかナイヨ。

治療のためだよ治療の。

別にどんな筋肉してるのかなーなんて思っちゃいないんだカラネ

異性に興味はまったくなかいが、鑑賞対象として男を見ることはリ
ーシヤは好きだ。恋人とか、そういう関係になると一気に萎えるの
だがただ単に目の保養の対象として見るだけなら、無類のイケメン
好きだった。

美形は手に届かないものだから美形なのだ。

持論である

それを自分みたいな平凡女が恋人関係になりたいとか考えるのは考
えるだけでおこがましいというもの

そこらへんはちゃんとわきまえているのだ。

遠目に美形さんを見つけたら「お、今日はラッキーだな」なんて
くらいの気持ちで眼福しながら眺めているのがリーシャに見合った
最善の“世の美形さん”とお付き合いの仕方だった。

世の中には分不相応、向き不向きという素晴らしい言葉がある。

それをリーシャは日本人らしく悲しくなるくらい純粹に踏まえていたのだ

決して顔にはださないものの、久しぶりに見た美形に胸を高鳴らせ
ちよっとした淡い期待を抱きつつ、リーシャは釦をすべて外し終えた

しかし隠されていた新たな傷口をみつけた時、無表情を繕っていた
表情は一気に歪んだ

「あーもう。太陽神のバカヤロー、一体何を考えてるんだよー」

思わず陰口も叩きたくなる

つい今まで感じていた邪念も吹き飛び、リーシャは彼の傷口をそつとなぞる

驚きと呆れを通り越して今度は若干の怒りを感じてきた

傷は男のわき腹に深く、心臓の近くまで“呪い”が浸食している状態だった

ここ最近、パンゲアのある国がしつこく、腐った納豆のようなね

ちっこさでこちらに全面戦争持ちかけてきていた理由がようやくわかってリーシャは納得しながらも心底呆れる溜息を吐いた

「でもこんな髪色して、よくここまで『下』で生きてこられたなー。大変だっただろうに。」

きつと利用されるだけされ、あとは物のように扱われていたのだろう

黒髪で、身体から溢れんばかりの魔力

パンゲアも、これなら「上」を滅ぼせると思ったに違いない

男に対して哀しみの感情を持ち、リーシャは「下」の欲に溢れた人間たちが今まで以上に嫌いになった

「—————今、楽にしてあげる。その“呪い”相当きつい筈だろうから」

私と同じだ……。リーシャはそう思ったのだ

片手を男の胸の上に突き出し、掌に自分の気を集中させる

すると、男とリーシャの下に大きな魔陣が浮かび上がった。

ほのかな緑色を帯びた魔陣は男の下でゆっくりと反時計回りに回り始め、次第に光の粒を無数に帯び始める。

無数の光の粒は次々とリーシャの手の下に集まり、その明るさを大
きいものにしていく

共鳴するように、ざわざわ…と、ふたりを囲う草木が己の葉をこすり合わせる。

リーシャの魔力の風になびくように、ふたりの服や髪がなびいていく。

目を、瞑った

『……月の女神よ、この男の生命の水をお飲みになるのはお止めください。』

唐突にぼそっと、リーシャは今まで喋っていた言葉とは違う言語でそうつぶやいた

――
あら、残念。

からかうように、でもちよつと残念そうな声が頭に響く

―――
ついにリーシャにも、春が来たのかしら？

『馬鹿なこと言わないでください。これ以上すると、太陽神にあな
たの居場所を言いつけますよ。どうせまた逃げ出してきたんでしょ
う？
』

そう言った途端、女神はいやゝ やめてゝ と叫んで気配を消した

リーシャは軽く嘆息し、目を開けた

気を取り直し、充分に集まった光の玉を男の傷口にあてる。すると
傷は見る間に小さくなり、10秒もかからないうちにその傷は消えた
それと同時に他の傷も癒されていき、魔陣が消えて光の粒も霧散す
る時には全身の怪我と傷はすべて綺麗になくなったいた。

死んだように真っ青だった顔も赤みがさし、細い呼吸も熱い吐息が漏れるようになった

これで安心か――――。

ほっと安堵の息を吐き、リーシャは微かに唇の端を上げる

すると、

「ん………………。」

身じろぎする

男はゆっくりと長いまつげに飾られた瞼を持ち上げて、リーシャを見上げた

「目が覚めたか？」

慌てて唇を戻し、リーシャは平坦な声で問うた

これが、ふたりの出逢いだっただけだ――――。

熊は黒髪を見つける（後書き）

ちよつと長くなった？

ちまちまと1週間書きためて、ようやくpですw
でもまだヒーロー全然喋れてないorz

次は初絡み

太陽はお月さまと出会います（前書き）

本当は月曜にはう p できるはずだったのに―――！ ちょっと目を離れたすきに P C が固まって泣く泣く再起動を余儀なくされデ―タすべて消えました ……泣きたい 喚きたい

太陽はお月さまと出会います

純粹に、綺麗な瞳だと思った。

だがそれと同時に、はあああああ大きな溜息もつきたくなった

「目が覚めたか？」

髪色と同じ色をしたまつげに縁取られた瞼がゆっくりと上がり、その瞳とリーシャのそれがかち合った。

その瞳は、透き通るようなアメジストの色だった。

疑いが、確信に変わる

目があった瞬間、男は眼を見開き、それと同時に思いっきり眉間にしわが寄った

あう、美形はどんな顔でも美形だな――――

鼻血でそう

リーシャは呑気にそんなことを思った。

しかし、次の瞬間男は素早く起き上がり彼女の前から消えた

顔をあげるとリーシャから数歩離れたところに男はこちらを睨みながら威嚇していた

「…………お前はだれだ。」

奥底から絞り出すような低い声

リーシャは眼を細めてそんな男を見つめた。

「だれだと思う？」

質問を質問で返した

血に濡れた服を気にすることなく、リーシャは立ち上がりニヤリと口角を上げて男を見据える

――――私だって自分が可愛いんでね。そう簡単に名乗るわけにはいかないんですよ

「俺の質問に答えろ、答えなければ……斬る。」

リーシャの答えが気に食わなかったのか、男はいつのまにか右手に細身の剣を握っていた

―――へえ、もうある程度は自然に従属できるんだ。

気を失って倒れていた時男は帯剣していた様子は見られなかった。服も、上半身だけとはいえリーシャは脱がしたし、その時も武器になりそうなものが隠されているような様子はなかった。

ということとはつまり、男は魔法を使って剣を呼び寄せたということになる。

魔法とはほとんどの奴が使う時仰々しい呪文を唱えたりするものだが、この男は物を自分の手で取るかのように自然と魔法を使っている―――それほど魔力が強い証だ。

「上」の、しかもリーシャの力が最も強く影響されるこの島で、ここまで高度な魔法を使えるとは……

さすがにリーシャも少々驚く

「……………やっぱチートってすげー……………」

思わずつぶやいた言葉は小さくて男の耳には届かなかったようだ

「もう一度だけ聞く。お前は誰だ。」

もう一度男は問うてきた

リーシャはその瞳をじっと見つめる

剣を手にする男の透き通る瞳は、なぜだか少し怯えて見えた

リーシャに対しての怯えではない

もっと、もっと大きな……存在

――ああ、そうか

ふと、とリーシャは腑に落ちるのを感じた

――彼は、怖いんだ。

笑った笑みが濃くなっていく

「………！　なにを笑っている！！　答えないのなら切り捨てるぞ
！」

刹那、男は剣を構え、リーシャに向かって突進してきた

その切っ先は迷うことなく、彼女の喉笛を狙っている

瞬間、リーシャはすかさず己の魔力を足元に集中させ、自分を囲うように魔力を創り上げた

ガキイイイイイイイイインッ

その次の瞬間、剣がリーシャの創り上げた結界に叩きつけられなんとも嫌な音が大音量で耳に入ってきた

だがリーシャは傷一つ付かなかったし、眉一つ動かさなかった

「お前……結界魔法が使えるのか？」

一気に距離が近づいた男の顔は驚きに満ちていた

そりゃそうだ。

結界魔法は魔術の中でも高等な魔法。自分を360度守ることのできる結界は恐ろしく魔力を消費するため、魔力の多い者しか使えない。普通の魔術師なんかは一方だけを守る楯魔法を主に使う。それにしたって魔力が弱い人は創りだせないという。

それを一瞬で、しかも詠唱なしで創り上げたリーシャを見て男が驚くのも無理はなかった

しかしリーシャにとってみれば楯魔法のほうがよっぽど扱いにくい

魔法だ。

今回は剣術での攻撃だったため、この場合わざわざ全方位保護する結界でなく、楯でも十分事足りるのだがリーシャはちまちました楯魔法より適当に魔力をぶっ込んでおけばいい結界魔法のほうがよほど扱いやすかった

高くジャンプし、距離をとった彼は腕を振って剣を消す。それをみたリーシャは笑うのを止めて溜息を吐く。そして結界も解いた

「あのね、あんた。よく自分の身体見てみたら。」

腰に手をあてて、呆れるように男を見る

リーシャに促されるまま、男は自分の身体を見下ろした

「傷が…… “呪い” も、消えている————。」

にわかには信じられなかったのだろう。

身体のあちこち触って確認する彼は今の今まで自分の服が脱がされていることも、傷が癒えていることも気づかなかったらしい。

「お前が、治してくれたのか……………」

信じられない物を見るかのような彼の視線にリーシャは眉をひそめる

「そりゃ、自分ちの庭に人が倒れてるのをそのまんまにしておくわけにいかないだろう。」

何が悲しくて死体をそのまま自分の庭に放置しなければならないのだ

私には死体を庭先に飾る趣味はないぞ

何言ってるんだ、コイツ。的な目で男を見ると、彼はますます驚きの表情を浮かべた

「治癒魔法も使えるのか————？」

そりゃあね、一応ひとりで「下」の軍勢を毎度叩きのめしてますからね。

頷いて見せると男はなんだか気まずそうに

「それは……………、すまなかった————。命の恩人に刃を向けるなどして…、人として許されない行為だ————。」

顔をうつむけ謝る男。しかし、その顔が若干赤く見えるのは気のせいだろうか―――？

「いや、別にいい。あなたもそうならざるを得ない所で育ってきたんだろう？ 幼いころについた癖はなかなかとれないだろうし、気にしないでいい。」

「だがしかし―――」。先ほどの結界魔法もだが、治癒魔法も相当な魔力をつかうだろう。俺を治しても、お前が倒れるかもしれないじゃないか……」

おいおいおい

こんな魔法使った程度で倒れるほど、私は軟ではないよー。

もし今また「下」が戦いを仕掛けてきても、まだ余裕で戦える自信がある

リーシャはちよつと憤慨した。相手にはわからないほど、小さく眉をひそめる

「人の心配する前に、自分の心配をしたらどうだ？ 器だけバカでかいくせに、肝心の魔力がちつとも感じられないぞ。」

その言葉に、男はああ、と自嘲気味に笑った

「そうか、どうりで思ったように動けないはずだ……だが別に、魔力なんてないほうがいい。あつたところで皆から畏怖の目で見られるだけだ。」

うわ、こいつ。相当「下」で酷いことされてきたんだな……

普通、魔力のある人間は周りから羨ましがられ、魔法が使えるようになる。「下」では重宝されると聞く

それでもこの反応というのは、魔力が強すぎて羨む以前に恐怖が出

てくるのだろう

「お前は、俺が怖くないのか――？ 魔力がないとはいえ、器がみれるならどれだけの魔力が俺にあるのかわかるだろう。大体の奴は最初は近づいてくるが、魔力のでかさの片鱗をみせるとすぐ逃げていく……」

男はリーシャの魔力も、その気も見えていないようだ

“呪い”と傷に抵抗するのに魔力をほぼ使い切ってしまったのだろう。そのため、リーシャは多少魔力がある少女としか見られてないらしい

「なにをふざけた事を言ってるんだ？ 魔力で私があなたを怖がるなどあったまるか。」

馬鹿馬鹿しい。

そもそも自分はその魔力をつかさどってる神の半身なのだから、なぜその魔力を怖がる必要がある？

リーシャは表面を装いながらも、彼を観察しながらそう言った。

しかし男はその言葉に大打撃を受けたようではっと目を見開き、こちらを凝視する。ありえない物を見るような顔だった。

「私はあなたを怖がらないし、その魔力にひれ伏したりもしない。私には魔力や見てくれに左右されない目を持つてるからな、あなたがその稀な容姿をもつていようがそれであなたに対する態度をどうこう変えようなんて思わない。」

駄目押しとばかりにリーシャは男に言葉を突き付ける

「――っ！」

しかしリーシャはその言葉が男にとってどれだけの意味と衝撃をもたらしたか全く気付いてなかった

彼女にとってはほんの慰めのつもりだった。
男は雷に打たれたかのように、もう驚き以外の感情をとられたかのように、ただただ驚愕の表情を向けてくる。

「……………っ 本当か—————?」

子供が親に縋りつく時のような声だった。

リーシャより年齢も身長も高い彼がそんな声を出すもんだから、一瞬リーシャは身悶える

うお！ 美形が仮面の中からふと見せる子供のような表情！！
まんな—————い！ た

「俺が、半分人間じゃないような奴でも、お前は変わらずにいてくれるか—————？」
」

一瞬リーシャは訝しげな表情を浮かべた。

変わるも何も、あなたには早々にお帰りいただく予定ですが？

「――――別に、あなたが普通の人間じゃないかなんて、もうとっくにわかってるけど。」

また、男に驚きが生まれる

「……ああ、そうか。私がだれだかわからないんだったな――――。だが、そうなのだろう？ みればわかる。その髪色、瞳、その普通の人間には大きすぎる“器”……。そのすべてが太陽の“神愛者”しんあいしゃそのものだ。」

神愛者

莫大な魔力を持ち、その名の通り神に愛された、選ばれた者――――

その言葉が出た瞬間、男の肩がピクリとわずかに揺れた

「本当に——何者なんだ？」

三度目の、問いだった。

知りたい？

「人に名前を聞く時はまず自分から。　　だろう？」

一瞬でリーシャは男の目の前に転移した。

なぜ、こんなところに転移してきたんですかね？　あんな怪我して、あなたにとって敵の陣地ど真ん中に、しかもひとりで

「さあ、あなたは誰？　皇子殿下。」

笑顔で、嘘を許さない瞳で、そう告げた

太陽はお月さまと出会います（後書き）

一度目はP Cが固まって消え、そして二度目は、更新しようと思っ
たらサブタイトル未記入でエラーをおこし、また書き直す羽目に――

――！！

うわー 自分のドジさを何とかしたい

もうタイピングのしすぎで腰と首筋が痛いよー

ようやくふたりの絡みだよー

今日は台風の影響でお休みになったのでなんとか書き上げました。
い、一番最初に書いた時より疲労感が半端ない……！！

何度も書き直したため、最初よりちょっと内容が変わりました。

チートの正体は皇子様（前書き）

実は昨日は作者の誕生日でした。↑だからなんだよ。途中から視点
がぐちゃぐちゃに……

チートの正体は皇子様

「……気づいていたのか。」

顔を歪ませる皇子殿下はバツが悪そうにこちらを見る

「————いや、もともと“神愛者”は魔力の素質が大きい王族なんかがなることが多いから、そうなんじゃないかとあたりをつけたただけだ。」

なんてことない。という感じで答えれば皇子は複雑そうだ

「俺が王家の者だとわかっていたのなら、名前だってわかるだろう。半分追い出されたような身だが、お前の言うとおり俺はゼフェロン皇国の皇子だ。しかも………いつ弟に奪い取られてもおかしくないが、皇太子の座も持っている。」

うへえ。皇子は皇子でも、皇太子様か！ しかもやっぱゼフェロン皇国……！

こりゃ本当に厄介な物を拾ってしまった。

ゼフェロン王国とは、^{パンゲア}「下」の中でも一番の国土と軍事力をもった
大国だ。

しかもここ最近^{ヴァイトル}「上」に戦争をしょっちゅう仕掛けてくる迷惑極まりない、リーシャの安眠妨害でしかないやっかいな国でもある

意識を取り戻す前に転移魔法で「下」に送り返しとけばよかった――。

後悔してももう遅い

皇太子殿下は目を覚まし、こうやって今自分と喋っているのだ。

「……………別に、私は「下」の王室問題なんか興味ない。知りた
いとも思わないし。皇帝の名前すら知らない。だからその子供の名
前とか把握なんかしてない。」

リーシャの言葉を聞いた皇子殿下は訝しげな表情をする

「「下」……………？ それはパンゲア全体のことを指す言葉だろう。ゼ
フェロンを指す言葉じゃな……………もしかしてここはゼフェロンじ
やないのか？」

どうやらこの皇太子様は自分が「上」に来ていることに気づいてな

いらしい。

魔力が極限まで減ってるから、
「上」の魔力の流れに気づけないのか―――。

いや、これはこれでやっかいだ。

おそらく皇太子様はここには転移魔法で来たのだろう（というか、それ以外方法がない。）しかしここまでするにはそれ相応の魔力が必要だから誰かに勝手に飛ばされてきたという可能性はほぼない。

ということは、自力でここに飛んできたはずなのである

「皇太子様は転移魔法でここまできたんだろう？ あれほどの“呪い”を受けていたし、多分誰かから逃げてここに来た……。まさか魔法を発動させるときに転移場所を正確に決めていなかったのか？」

腕を組んで考え込みながら、リーシャは皇子に問うた

「確かにお前の言うとおり、俺は追手から逃げるために転移した。だがその時は敵側にも魔術師がいて俺が逃げそうな場所にはすべて

“魔法除け”されていた。だからとりあえず、俺に害の及ばない、暗殺者たちも追ってこない場所。に転移した。」

けろりとそんなことを言っただけの皇太子にリーシャは愕然とした。

いやいやいやいや。転移魔法ってはっきりと目的地をイメージしないと飛んでる時に時空の狭間に閉じ込められるだが！？
ていうか暗殺者？ 皇子様の身の回りはなんて物騒なのだ。

曖昧にイメージした場所に飛ぼうとするなど無謀なことこの上ない。

たとえば友人が旅行にいった、『すごいいいところだったよ』と言われれば誰しも興味が湧き、行きたくなるものである。

そういう場合はなんとかまだいける。

人づてでもその場所の名前や位置がハッキリわかっているのならば魔力さえ強ければ転移することも可能だ。

本などで見つけた場所も同じ。

それが本当に実在するならばその目的地に行ったことがなくても飛ぶことができる。

しかし、この世に存在するかさえ分からない場所。例えばとても痛い子が『この世の理想郷に行きたい！！』と思い立ち転移しようとしたとする。だがそれはどんなに魔力があつたとしても不可能だ。誰も見たことがない。本などに書かれている絵も空想の理想郷でし

かない。もし實在さえ怪しい場所へ転移しようとする、転移する時は誰しも通る時空の狭間に取り込まれ、二度と出れなくなるのだ。

だが、目の前にいる皇子様はそれを簡単にやってのけたという。

「チートすぎる……。」

もはや神の域ではないか。

「？　なにか言ったか。」

なんでもありませんただのひとりごとです気にしないでください――
――。

つまり、その神業な転移魔法でたどり着いたのがここだったわけですね……

まあたしかに、ここには暗殺者もこないだろう。絶対にこないだろう。ていうか来たらおかしい。

リーシャはひとり納得するが、同時にそんな曖昧な転移魔法でここにたどり着けるということはどんだけこの男は魔力を持て余してい

るのだと背筋が寒くなった。

と、とりあえず、彼は今自分がどこにいるのかわからないらしい。
なら口で伝えるより現状を見せるのが一番だろう————。

「まず言っておくと。ここはゼフェロンではない。」

前置きしておくと、皇子様は渋い顔をしながらも頷いた

「そうか。一応ゼフェロン皇国内で転移したかったんだが、条件に合った場所が国内にはもうなかったんだな。」

「ついでに言っておくと、ここはゼフェロンでもその隣のパウスケア王国でもまたその隣のルグリツイニ王国でも、ましてやパンゲアのどこでもない。」

ちよつと首が痛くなってきた————

ふいにリーシャは首筋に痛みを覚える

なんにしろ皇子様の背はものすごく高い。190cm位は余裕であるだろう

日本人女子の平均身長より少し高め、160cmのリーシャから見てもその身長はまるで巨〇兵———

首も痛くなるはずだ。

なんとか皇子を見上げたまま言うとその顔はなんとも形容しがたい顔になった。

「パンゲアでもない……………？　じゃあここは———
———」

どうやら思い当った場所があるらしい。

皇子様のようやく戻った顔色はまた真っ青になっていく

リーシャはそれ以上は何も言わず、右手を上げて軽く振った

この庭は四方をすべて草木に囲まれており、外の様子を見ることができない

しかしリーシャが手を振った瞬間、皇子様の背後の草木がスルスルと音を立てて脇に逸れ始めた。木々が立ち退き、除々に明らかになっていく外の風景

皇子様は振り返り、そして愕然とした。

思わず走り出し、縁ギリギリまで近づく

「あんま乗り出さないほうがいい。落ちたら死ぬ。」

皇子様の目に飛び込んできたのは、まず視界いっぱい、青空に浮かぶ大小無数の島々。そして、その視線を下に移すとはるか下方にどこまでも続く無限の大地だった。

開いた口がふさがらない

皇子はただ呆然とその光景を見下ろすことしかできなかった

無意識とはいえなんてところに転移してしまったんだ……。

ひとり自己嫌悪に陥っている皇子様。その隣に静かに立ったリーシヤは彼と同じように下界を見下ろした。

「見ての通り、ここはヴァイトル「上」。そしてこの島は“「上」の魔女”の住処の聖なる島だ。」
アウカンシエール

衝撃が大きすぎて言葉が出ない

ぎこちなく少女を見れば、彼女は微かに笑っていた
その笑みに、皇子は引き込まれそうになる。

血まみれの服を着て、腰まで伸びている限りなく薄い薄茶の髪を風
になびかせて、琥珀色の瞳は宝石のような輝きでこちらを見据えて
いた。

彼を恐れない瞳。臆することなく、怖がることもないまっすぐなそ
の瞳

敵だ。

長年父親が戦を仕掛けている相手

魔女と呼ばれ、月の女神の半身ともいわれる彼女は「上」を守り導
く「上」唯一の人だ。

皮肉なことだ。

彼女の首を喉から手が出るほど欲しがっている者の息子でありなが

ら、その魔女に命を救われるとは――――。

だが、目が離せなかった。

ありのままの化け物のような自分を当たり前のように受け入れてくれた

恐怖に慄くことも、欲望に塗れた視線をよこすこともしない。

“神愛者”というだけで家族からも見放された彼には、周りから見れば利用価値のある物としか見られていなかったのだ。

それなのに彼女は俺の存在を認め、いともたやすく受け入れた。

彼にとって生まれて初めての出来事だった。

正直戸惑った。

こんな感情が生まれたのは初めてでどう対処すればいいのかわからなかった。

だが止めることはもはや不可能だった。

敵か味方なんてもうどうでもいい

どうせ父親とも思っていないただ血のつながりがあるだけの男のために何かしようなんてこれっぽっちも思っていなかった。

ただ

彼女の傍にいたい。

彼女に触れていたい。

彼女を抱きしめたい。

彼女を守りたい。

彼女のその唇に触れたい。

彼女のその髪に手を通したい。

そしてなにより

彼女と生きていきたい――――。。

そんな欲望が入り混じって彼の体内を駆け巡る

熱を帯びて彼はカッと熱くなった。

俺は、一体どうしたんだ――――。。

わからない。

ただ。彼女に出会ったことによって、俺は生きる意味を知った気がした。

「…………アーディアルト。」

気づけばそう口走っていた。

え？ と首をかしげる彼女。その仕草ひとつひとつが可愛くて、思い切り抱きしめたくなる

「名前だ。アーディアルト。」

こらえ切れなくなって、胸に抱きしめた。驚いているのか、硬直する彼女に構わずにさらにきつく抱き寄せる。

「貴女の名前は？」

耳朶にそつと囁く。すると呆然としたように

「……………リーシャ。」

とだけ彼女は答えた

リーシャ。

リーシャ。

耳を通して頭に響くその言葉はまるで媚薬のようにアーディアルトを痺れさせる。

ああ、リーシャ。

ずっと一緒に、傍にいてくれ。

きっとこれは、運命の出逢いだ――――。

チートの正体は皇子様（後書き）

なんか今までの見返してみたら改行が多すぎる気がしたのでちょっと少なくしてみました。

いやでも最後のほうはあんま変わらなかったかな

視点がグチャグチャしちゃってごめんなさい（汗　そしてまだまだ説明不足過ぎて舞台がよくわかりませんね！！

つ、次こそは……！

惚れられました。一目惚れってやつで

皇子様の行動にしばらくリーシャは思考が付いていけなかった。

真っ白になった頭で、冷静に状況を整理しようと頑張ってみる。

腰と頭に回された力強い腕と、頭に寄せられた彼の頬

その口からこぼれ出る熱いと息が耳にかかり、無償にくすぐったかった

皇子様を見上げてたはずのその視界はいつのまにか真っ暗になっていて、そこでようやく彼の胸の中にいるからだと気づく。

—————え、え、なにがどうなってんの？

ようやく名を名乗った彼に今度はこちらの名前を聞かれ、リーシャ

は呆然と自分の名を告げるしかなかった。

生まれてこの方、リーシャは里沙だったころもリーシャになった後も男に抱きしめられたことなんて一度もない。

最近の子供はマセてるなんてよく言われるが、そんなのはクラスでもギャルい一部の中心グループの子たちだけだ。

普通に大人しい子や、ましてや地味めな子なんて男女のお付き合いというものに憧れこそ抱きつつも実際はそんな少女マンガとか乙ゲーみたいに上手くいかないよね。と現実をちゃんと把握してる。

ましてや、こんな人間離れた美形に抱きしめられるなんてそれこそ二次元のお話。現実であるわけない。

……リーシャもそう思ってた。

だがしかし、現実とは違う意味でそんなに甘くなく、今現在リーシャは目ん玉が飛び出るイケメンにこれでもかというくらいに抱きしめられている。

嬉しそうに、それはもう嬉しそうにリーシャ、リーシャと反芻する皇子様ことアーディアルトは頬ずりしていた頭にそっと口付けた。

ちゅ、というリップ音がリアルに耳に響いてくる

ゾワッ　と悪寒がこみ上げた

軽くパニックに陥っていたリーシャはやっとフリーズから解放され、とりあえず皇子様……アーディアルトから逃れようとする。

「ちよっ！　離して…！」

もがくようにして離れようとするが、それを察知したアーディアルトは逃がすまいとさらに腕に力を込めリーシャを腕のなかに閉じ込めた

ぐえ！　い、息ができない……！　ていうか鼻がつぶれるわ！！

胸をたたいたり、腰をひねってなんとか逃れようとしたが、それをすればするほど比例してアーディアルトの腕の力も強くなっていく

おい！　さっきまであんた瀕死の状態だっただろう！？　どこにこんな力があるんだよ！

そんな攻防を繰り返すこと数分。さすがに疲れたのか、リーシャは

ぐつたりと脱出計画をやむなく断念する。

それに満足したのか、アーディアルトはぎゅうつと抱きなおした

ああ、これで鼻が低くなったな……。

ただでさえ低いのにな

魔法を使えばこんな拘束簡単に解けるのだが、相手は今ほとんど魔力がない状態なのでヘタに他人の魔力を浴びせるようなことをしたら彼の身体に悪い。

「……………リーシャ、俺の太陽—————」。

熱っぽい声で、愛しそうにアーディアルトは呟く。

その不意打ちの言葉にリーシャは不覚ながらドキッとしてしまった。

違う。私は太陽なんかじゃない。

しかしそんな感情もすぐに沈む。

私は太陽じゃない。あんな風には輝けない

誰も直視できないほどの輝きを持って、世界のすべてを温かく包みこむことなんてできない

私にできるのは、冷たく世界を見下ろして闇の影をさらに濃くすることだけ。

むしろ、あなたのほうが太陽と呼ぶにふさわしい人でしょう――
――？

ここへきて、リーシャはなぜだか無償に泣きたくなった

神でも人間でもない、中途半端な存在。^{ヴァイトル}「上」を守るためという免罪符を掲げて、今までいくつもの罪を重ねてきた

何度もこの手を血に染めて、血で血を洗ってきたの

あなたを助けたのだって、心のどこかで助けたら許されるんじゃないかと思っただけ

そんなこと、あるわけない。わかってる

これが私の役目だから、それを言い訳にして逃げてるだけだ

“死神の魔女”。

いつのまにか付いた「^{パンゲア}下」でのリーシャのふたつ名

これ以上ないくらいぴったりな名前

自嘲気味にリーシャは笑った。

彼にこの顔が見えなくてよかった。きっと、酷い顔をしているだろうから。

しかしアーディアルトはそんなリーシャの心情に気付いたのか、ふと身体を少し離してこちらを覗き込んできた。

慌てて表情を戻す彼女をまっすぐ見つめるアメジストの瞳は熱を孕んでこちらを射ぬいてきた

「リーシャ……………」

アーディアルトは苦しそうに呻いた

「俺の前で、そんな苦しそうな顔するな————」

両肩に置いていた手をリーシャの頬に当てて、親指だけ動かしてなでてくる

すぐに戻したはずだったが、見られてしまったのだろうか。

気まずくてうつむくとそれを制するように優しくまた顔を上げさせられた。

「大丈夫だ。俺がいる。」

力強く言って見せるアーディアルトはふっと笑顔を見せた

な、なななんか先ほどまでとずいぶん態度が違いすぎやしませんか！？

急に漂ってきたむせ返るような甘い香りの雰囲気からリーシャは自嘲する気持ちもぶっとんで激しく動揺する

「リーシャが辛そうな顔してると、俺も辛い。リーシャが苦しいと、俺も苦しい。」

悩ましげに眉を寄せて、ついさっき会った人に向けるにはいささか
激しすぎる台詞をいとも簡単に言ってくる

「俺が全部受け止める。俺が変わりにリーシャの辛いこと全部受け
止める。だから……」

言葉にならないのか、そこで一旦口をつぐんだアーディアルトはや
がて決意したような顔をした

顔を傾けて、なでていた両手でリーシャの頭を固定する

へ？ な、なにをする気――――――

「――――――っ！――」

除々に近づいてくる彼の顔。

一瞬遅れで身の危険を感じ、暴れようとした時にはもうすでにアーディアルトの唇はリーシャのそれを塞いでいた

き、き、き、キスうううううううううう！！？

これでもかというくらい琥珀色の目を見開いてリーシャは目の前の顔を凝視する

ちよつとまで、私はなにか。この美形皇子様と接吻なるものをして
いるのか！？

あまりのショックで固まるリーシャをよそに、アーディアルトはしばらく触れるだけのキスを繰り返す。

しかし一向に口を開けないリーシャに限界が来たのか、下唇を食んでその舌でペロリとなめた

「ひ、ひゃ……っふ——！」

思わず声がでて口が開く。その瞬間を逃さず、アーディアルトはそこに自らの舌をねじ込んだ

反射的にリーシャは舌を引っ込ませるがアーディアルトは無遠慮に口腔内に侵入してきて彼女の舌を追いかけまわす

「ん————っ！」

たまらず声にならない叫び声を上げるが、その声は無残にも彼の中に消えていく

歯列をなぞられる。

舌を甘く吸われる。

どちらともつかない大量の唾液が二つの口を行き来し合う

たまらない羞恥にリーシャはドンドンと拳でアーディアルトの胸を叩くが、ビクともしない

何度も角度を変えてキスの雨を降らせる皇子様にもうなにがなんだからリーシャは分からなくなつた。

彼女の心情を現わすようにリーシャの大量の魔力が渦巻いてあたりに撒き散らされていく

そもそもなぜアーディアルトにキスされているのかがまったくわからない

なぜ先ほどあんな甘い言葉を言われたのかもわからない。

仮にもリーシャと彼は敵対している者同士だ。こんな状態になるのはおかしい。すつごくおかしい

もうリーシャは混乱するしかなかった。
しかし繰り返される深い濃厚なキスにやがて思考力も酸素も奪われていく

「ふ……あっ……ん————」

口から漏れ出る自分でも聞いたことがない声に羞恥で肩を震わせる
逃げては捕まって甘く吸われて。

ふたりの唾液が混じり合い、口の端から卑猥な水音とともにこぼれ
出る

ま、まずい。貞操の危機を感じる………!!

今までそんな危機はほとんど感じたことはなかったが、さすがに今回
はリーシャの脳内の警鐘音はビービー鳴りまくりだ。

魔法を使おうと何度も思うが、やはり彼のことを考えるとなかなか
やりづらい。

無理やり唇を奪ってる相手にそんな気遣いもないと思うのだが、リーシャはやはり魔法を使うことはできなかった。

もうどうすればいいんだよ――――！

先ほどとは違う意味で彼女は泣きたくなった。

そんな地獄とも呼べるような状況がようやく治まったのはそれから数分後のこと

ゆっくりと離れていく唇とリーシャの唇に銀色の糸が垂れ落ちる

アーディアルトはそれを見ると喜びに顔を染めて、リーシャの口に付いたモノと一緒に舌で舐めとって。

酸欠でぐったりしている彼女を再度抱きしめた。

「リーシャ……」

身体がだるくて何も反応できないリーシャをいいことにアーディアルトはその頬、額、こめかみに軽いキスを落とす。

「なにを……なんで、こんなこと……」

言葉にできない疑問をやっと口にする、

「好きなんだ……。リーシャのことが。」

真剣な瞳で、懇願とも呼べる声で、彼は告げた。

また目を見開くリーシャにアーディアルトはさらに言う

「一目惚れ……といったら信じてくれるか？」

リーシャは本日2度目、全身がフリーズしたのを感じた。

惚れました。一目惚れってやつで（後書き）

なんだか展開が早すぎる気がしてこゝ……

川の流れるように流されてはいけません

「……………」

い、今 この人は何を言ったんデシヨウカ？

口をポツカーンと開け呆然とアーディアルトを見上げると、その顔が面白かったのか、アーディアルトはくすりと笑みを浮かべた

あ、笑顔もイケメン。

——って、いやいやいや。そうじゃなくて！

自分の耳に聞き間違いがなければ今この人は私に…ひ、ひ、一目惚れしたと、いわなかったでなからうか？

「————可愛い。」

ひとりあたふたと考えている間に
ブニツと片頬を摘まれた。

びよーんとリーシャの皮膚がだらしなく伸びる

えええっ なにその不意打ち！

混乱するリーシャとは反対にアーディアルトは笑顔がどんどん深くなる

それと比例して皮膚もどんどん伸びていく

びよ~~~~ん。

「い、いひゃいんだへど！」

気づけば最初は片頬だけだったのが両頬になりありえないくらいリーシャの頬は伸び切っていた。

「ああ、すまない。つい、な。」

くすくすと笑うアーディアルトから顔を取り返し、赤くなった頬を

さすつっていると不意打ちで今度はその頬にキスをされる

「~~~~~なにするの！」

真っ赤になって慌てて飛びずさろうとするが、間一髪のところでは腰を掴まれてぐっと引き戻される

「離して!!！」

「嫌だ。」

何だろう！

こんなのはセクハラだ！ 軽い強姦だ!! 訴えてやる!!

美形はなんでも許されると思うなよ!!

「離したら逃げるだろう？ 離れたくない。」

「私は離れたい!!！」

じたばたもがく。が、それ以上の力でまた抱きしめられる

「……すまない。お前が可愛くて、止まらなかったんだ。」

「か、かわ——！？」

ないないないない！　ありえない！！

煽てもなにもでませんよ！

衝撃的すぎて動きが止まったりーシャをさらに引き寄せてアーディアルトは顎を捕らえて顔を向けさせる

「だが好きな女に、キスしたいと思うのは間違ったことなのか？」

首をかしげ、訪ねてくる

「その頬に、額に、唇に……リーシャの身体すべてに触れたいと思うのはいけないのか？」

甘ったるい声で、耳朶に囁いてくる

うぎゃあ！　なにその気障な台詞！

駄目に決まってるだろう！！

こんなこととして許されるのは画面の向こう側の人達だけなんだぞー！
ただし、イケメンに限る。なんだぞー！

———あ、この人もイケメンでしたね。充分すぎるくらい。

って違う！！

とりあえず、今全力でお願いしたいことは。

は
な
せ
！

「と、とりあえず。現状を把握しよう」

もうすっかり脱力状態でリーシャはそう言って地面に座った

もうすでに日も傾きかけてる
これからの夜の準備に備えなければならなので、このことに割り
てる時間はあまりないのだ。

「先ほども言ったが、ここは「上」の聖なる島で、私の住処の庭だ。
」
アウカンシエール

手早く説明を始める

それに続き、アーディアルトも地面に座った……正確にはリー
シャの真後ろに胡坐をかいてそこに彼女を乗せるようにして座った。

「…わざわざこんな体制で座る必要性はないと思うのだが。」

眉をひそめるがアーディアルトはどこ吹く風だ。「気にするな」と
いい続きを促す

「……それで、私は月神の半身でもある魔女。お前の国が今真っ向
から戦争を仕掛けてる場所の親玉だ。」

あまりに自然な動作だったため思わず閉口するが、少ししたら小さ
な溜息をついて諦めた。

この短い時間の中で彼に反抗しても無駄だということを嫌でも学習
したのである

「いいか？ 私はお前たちの国のことをどうこう思っていないが、
お前らにとっては私は敵で、この首が欲しいんだろう。仮にも皇
太子様とあろうお方がそんなふざけたことを言っているのか？」

もしかしたら神愛者で魔力のあるこいつをここに送らせてリーシャの首を取ろうと画策したのかと思わなくもないが、あの傷の様子からしてその線は薄い。
演技だったのだとしても自らの国の皇太子にあれほどの傷を負わせるなどしないだろう。

「国のことなど関係ない。俺がお前のことを好きになったからそう言ったまでだ。」

わお！ 直球すぎる告白プロポーズですね！ もし私が第三者の立場だったら
今頃キヤーキヤー騒いでますよ！

「それに、俺は皇太子といってもゼフェロンの政にはまつりごとほとんど首を出してないし、あんな国捨てたってかまわない。」

ゼフェロンにとって俺は体のいい魔力源なのだ。とアーディアルトは自嘲気味に話す

「魔力源？ ゼフェロンはお前の魔力を使ってこちらに戦争を仕掛けているのか。」

「ああ、ここ最近は「上」だけだが、少し前までは「下」の国との戦争にもな。奪われる量は俺にとっては微々たるものだが、ひと月の一度、馬鹿でかい魔石に魔力を勝手に入れられていた。」

それを聞いたリーシャはゼフェロンの愚かさに愕然とした

「神愛者はここ数百年でいなくなったとはいえ、その扱いはどうなんだ。昔は国の象徴として祭り上げられていたと聞いているし、神愛者の魔力は神の力と同義され神聖なものとして只人には不可侵なもののはず。」

「俺の前にいた最後の神愛者は124年前に死んでいるからな。そんな宗教めいた言い伝えはとくに捨てられた。太陽神も、ここしばらくは姿を見せられないから「下」全体でも信仰心が少しずつ薄れてきている。」

神愛者 とはその文字通り神に愛された者のことだ。

この世界では二柱の神が存在していると言われ、太陽神と月神と
呼ばれている。

兄妹神で、太陽神が“生”“昼”“光”“豊穰”“戦”“大地”などを司り、月神が“死”“夜”“闇”“癒し”“水”“自然”などを司っている。

太陽神が「バンゲア下」と呼ばれる大きなひとつの大地を創りだし、月の女神が「ヴァイトル上」と呼ばれるその大地のはるか上空に浮かぶ様々な無数の浮島を創りだしたと言われ、神愛者はそのどちらかの神のいわばお気に入りという存在だ。

神愛者は胎児の頃に神から力を授かり、程度に差はあれど人間にはありえないほど強大な魔力を持って生まれてくる。

太陽神のの神愛者なら黒髪にアメジストの瞳、月神の神愛者なら黒髪に黒目を持つという特徴があり、どれも美形。

太陽神はもともと金髪なのだが昔妹の月神が大好きすぎて自分の髪も黒髪に染めたといわれ、神愛者も金髪から黒髪に変わった。

ちなみに「下」は太陽神が創ったので太陽の神愛者は必ず「下」から生まれ、「上」は月神が創りだしたから月の神愛者も絶対「上」から生まれる。

神愛者が生まれてくる時は必ず世界に何か異変がある時だ。

過去に出てきた神愛者たちはどんな形にせよこの世界をなくさないために貢献してきたのだという。

そして世に安寧をもたらす救世主的な存在として人間たちから称えられた

だからその存在も御神の力として、只人が侵してはいけない不可侵なものとして扱われるはずなのだが。

「あー。最近太陽神めつきり引きこもって顔見せないからな。信仰心が薄れるのも無理ないか……」

「太陽神と会ったことがあるのか？」

「一応、ね。月の女神を迎えに行くためにあいつの神殿に行った時とか。」

あいつのシスコンぶりは見ていて目の毒になるほどだった。

月神の後をひつついて離れないし、何かにつけてはお姫様だっこしてるし、うざがってる月神に回し蹴りをくらっても一瞬後には復活して妹をこれでもかというくらい抱きしめていた。

神としての仕事をあまりしなくなったのも、月神と一緒にいたいから。というなんとも言い難い理由からだ。

ちょっとヴィートルで問題が起こったので迎えに来た私をみてものつすごい目で睨んできた。まあ私が半身だとわかると多少は態度を変えてくれたけど。

それでも私と一緒に帰ろうとする月神を無理やり引き留めようとするし、最後には鳥籠を創りだしてそこに月神を閉じ込めようとしていた。

……あの時の兄妹の攻防戦はすさまじかった。

ここまでくるとシスコンもただのヤンデレである。

「太陽神にあったことがある…か。さすがは月神の半身の魔女だな。」

ポツリと呟くアーディアルトは心なしか少し羨ましそうだった

あ、自分を選んだはずの神が一度も会ってくれないんだよね。そりゃ会ってみたいに決まってるか。

「いや、魔女といっても私は神でも人間でもない中途半端な存在だし。そんなさすがとかいわれるもんでもない。」

リーシャは神愛者ではなく、月神の半身そのものだ。

月神は人間が嫌いなため人間はヴィートルに住んでいない。だから必然的に神愛者も生まれない

そのかわり生まれたのが、魔女と呼ばれるものでヴィートルで唯一人型をしている生き物だ。

里沙はその「上」を守るために創られた、月神の半分の魔力を注いだ生身の人形の身体のなかに里沙の魂だけを入れたいわゆる憑依というものをしている。

だから髪の色も薄茶で瞳も琥珀色で、神愛者のような外見にはならない。

しかし、魔女になったことがあるのはなにもリーシャだけではない。彼女の前には約13人もの魔女がいたらしく、彼女たちもまたこの身体に魂をいれ、この世界で過ごしたという。

だから顔も身体も先代や先々代の魔女とか関係なくみんな同じ。性格に違いがでるだけで見た目はまったく一緒なのだ。

……お下がりにもほどがあると思わない？

てゆーかこの身体を他の誰かも使っていたと思うとなんだか気持ち

悪い。

まあそれはさておき

魔女は月神が異世界から連れてくる。

神愛者とは違うが同じく莫大な魔力を有する身体のため、それに耐えられる魂を持つ者を探すらしいのだ。

リーシャのときはなかなかいい魂が見つからず先代の魔女が亡くなってから約200年経っていたようで、ヴィートルは荒れに荒れていた。

月神そこはなんとかしろよ、なんのための神様だよ！ とリーシャは突っ込んだが月神は太陽神から逃げ回るので精いっぱいだったらしい。

……いろんところで太陽神に迷惑かけられてるな！

「今度太陽神の所に行く時は、あなたも連れて行ってあげよう。アーディアルト殿下。」

次なんていつ行くかわからないのだが、なんとなくそうしてあげた

くて気づけばそう言っていた

するとアーディアルトは一瞬驚いた顔をして……そしてほほ笑んだ

「ああ、ありがとう。……だが殿下なんてよしてくれ。媚びへつらう貴族のような呼びかたをしないでくれ。アーディでいい。リーシャにはそう呼ばれたい。」

「わかった。アーディ。」

後ろにいた彼に振り返って、リーシャは頷く。

すると、ますます笑みを深め、アーディは彼女の頬にまたキスをした。

川の流れるように流されてはいけません（後書き）

後書き 後半説明くさすぎてごめんなさいorz でもようやく舞
台感をだせてきましたよ！

起承転結の起の終わりあたりにようやく入ってこれました！

次回更新遅れると思います

2週間くらいは更新できないかな？

折り紙ってなにも正方形の紙でしかできないわけじゃないんです。(前書き)

お久しぶりです。お待たせしました(汗

折り紙ってなにも正方形の紙でしかできないわけじゃないんです。

アウカンシエール

聖なる島とは、ヴィートルの浮島々の中でも一番巨大な浮島である。楕円状の島は一面鬱蒼とした色とりどりの自然に覆われ、昼間はただの森でも夜になると夜の女神と同じようにほのかに光だし神秘的な空気を醸し出している

まるで一面宝石でできた島のように草木や水、花々など島のすべてがが蛍のように光を出したり消したりして、その光景をみれば誰でも御伽話の妖精や精霊の存在を疑わなくなる。本当だよ。私もそうだったんだから

島の中央には樹齢何億年ともいわれる他の木々よりもはるかに高く、月神の加護を受けた巨大な大樹がある。

その幹からは樹液の代わりに泉聖水と呼ばれる水が絶えず流れ出て大樹を中心に大きな湖を形成し、その水は島全体の生命を支えている

この大樹は“聖樹”と呼ばれ、ヴィートルの象徴ともいえ、敵対するパンゲアの民たちも知っているほどである。

大樹そのものに強大な魔力が秘められており、“アウカンシエール”の命の源といってもいいほどこの島の魔気は気の弱い者なら魔力に当てられて倒れるほど濃く充滿していて、それは満月になると一層増す。

そしてその満月の夜に、ヴィートルの魔女は己の役目を果たすため、今夜も大樹の頂上に登り世界を満月と共に見下ろすのだ――。

「やっかいな拾いものしちやっとなー……。」

本日何度目かわからなくなる溜息をまたリーシャはついた

太陽がすっかり落ちて、代わりに完璧な球体になった月が空のてっぺんに登りきったころ

彼女の姿は聖樹の高い位置にある一本の枝の上にあった。

視界のはるか眼下には数々の浮島とさらにその下にはところどころ明かりが灯されたパンゲアが顔をのぞかせ、耳には聖樹から流れる泉聖水の水音と、光輝く木々の風に葉をこすり合わせる音がやさしく流れ込んでいる。

風に髪をなびかせて少女は今夜も刻一刻と近づくその時を待ちながら、今日拾った男のこれからの対処に頭を悩ませていた。

「まったくリーシャはお人よしすぎるんだよ！　パンゲアの人間：しかもゼフェロンの皇太子を拾うなんて、頭どうかしてるんじゃないの!?」

心安らぐ音たちの中に突如として雑音、または騒音ともいう――――
――が紛れ込んできた。

「…うるさいなー。しょうがないじゃん。あいつがゼフェロンの皇太子なんてパツと見ただけでわかるわけないって。」

ぶうぶうと反論すれば　仮にもヴィートルの魔女ならそれくらい把握しとけよ！　とさらに大声で怒鳴られた

だから、ヴィートルの魔女だからこそ把握してないんじゃないの。なんでわざわざ敵の名前を覚えてやらなきゃいけないのだ。

ていうかルク。あんたもアーディアルトがどこの誰だかわかってなかっただろうが。

「なんでもいいから、ルク。もうちょっと静かにしゃべりなさい。」

近くにあった葉を一枚ちぎって折りながら、リーシャがほんの少し言の葉に魔力を込めて言うのと途端にルクと呼ばれた小さな精霊はうぐ…と黙りこんだ。

ふと、森においてきた青年がいるであろう場所に目をやり、遠視魔法を使って視てみると彼は先ほどまできていたリーシャの血まみれの服を多少回復した魔力を使って洗っていた。

あれ、あの服たしか家の洗濯かごに入れといたはずなんだけど――
――？

今あのワンピースは彼の魔法によって綺麗に洗われ、元の白さを取り戻している。

………なんであの服があいつんとこにあんの？

なぜ彼のもとにあの服があるのか分からずリーシャはちょっとした恐怖を覚えた。

ふと、リーシャの魔法に気付いたのか彼がこちらを振り返った。

あ、やばい。気づかれた？

向こうにこちらの顔が見れるはずなのにリーシャが一瞬たじろぐと、

ニヤリとなにか裏がありそうな笑みをこちらに向け、アーディアルトは何を思ったか洗い終わったリーシャのワンピースの丁度胸の部分にちゅっと口付け、弧を描くようにそこを舌で舐めまわした。

「―――――っ!!!?」

一気に顔がぶわっと赤くなるのを感じ、慌てて視線を元に戻す。

心なしか、くすくすと奴の笑い声が聞こえた気がした。

あ、あいつ……完全に人のことをおちよくっている――!!

「…だってあの男、リーシャにキ、キ……キスまでやりやがったんだよ!？」
リーシャの首狙ってる奴らの親玉の息子が、あんなこと

言うなんて絶対こっちが油断するのを狙ってるよ！　っていうかそもそもなんでゼフェロンの皇太子ほどの奴があんなボロボロになって倒れてなきやいけないんだよっ　怪しすぎるんだって！」

耳元できゃいきゃいなにか騒いでいるがそんなもの今のリーシャには全く届かなかった

だまっていればいい気になりやがってこの野郎……！！

美形は何でも許されると思うなよ！

色気をプンプン撒き散らせとけばこちらの気がそれると思うなよ！

一瞬奴の色気に当てられ赤面したのは事実だが。

今彼女はそんなことも怒りで頭からぶっ飛んでいた

リーシャの感情が高まるにあわせ、島の木々が、風が、水が、大地

がざわざわと揺れうごめく

奴も魔力の気配を感じ取ったのか、ヤバい。という顔をする

すると、アーディアルトの足元に流れていた小川が突然せき切ったように大量の水を飛び出させ、彼にものすごい勢いで頭上からたらいをひっくり返したようなシャワーを浴びせかけた

全身ずぶ濡れになる彼

はんっ　ざまあみろ　この変態！

水も滴るいい男　というのが限度を超えた水を浴びせかけたので今頃奴は髪が顔にかかり妖怪貞子状態になっっていることだろう。いい気味だ。

水にさりげなくワンピースを奴から取り返させ、今のでちよつと気が晴れたリーシャは遠視魔法を止め、また手元の折り紙作業に意気揚々と戻った。

「……リーシャ、僕の話聞してる？」

「ああごめん。まったくもって聞いてなかった。なに？」

半眼になって聞いてきたルクにリーシャは悪びれもせずしれつと答える

「なに？　じゃないよ！！　人の話はちゃんと聞きなさいってお母さんから教わらなかったの！？　だから、なんでゼフェロンの皇太子でもあるう奴がわざわざボロボロで“呪い”まで受けて、ヴィートルの結界さえも破ってこの島にいるのかって聞いているの！！」

先ほどよりかは幾分声を落として、だがまくしたてるように話す彼にリーシャは目線をくれることなく手元の葉の折り紙に視線を落したまま呆れたようにそれに応える

「……あんたのお母さんはある意味私だと思うんだけど、そんなこといちいち教えた記憶ないわよ……？　だって、あいつは太陽神の神愛者だもの。ヴィートルならともかく、パンゲアでは太陽神の信仰が若干であるが薄れつつあると聞いたし、只でさえここ何百年も神愛者は生まれてなかったんだから。昔のように崇め称えるんじゃない、その力におびえ利用し殺そうとする人間がいてもおかしくない。」

元々、尊敬と畏怖は紙一重なのだ。

当時の周りの反応や環境で人ならざる力を持つ者は恐れられるか敬われるか決まる

周りの人間たちの勝手な思い込みで彼らにとっての“正”か“負”かが決まり、そしてそれは根強く後世まで残っていく。

状況が状況なら彼は国民からも臣下からも神愛者ということで神のように祭り上げられていたのだろう。

今回はたまたま他に神愛者がいなかったということと、彼の魔力が他の神愛者よりもけた外れに多かったことと、周りの人間が彼を恐怖の対象としか見なかったということが災いしたのだ。

人間とはおかしなものだ

己が種族を守りたいがゆえに正を負に、負を正にと己の都合のいいように勝手に解釈できる力を持っている。

そこに力を持った者の意思は存在しないのだ。

「だからってなんでリーシャに惚れる必要があるの!?! キ……スして、抱きしめて!」

うるさい。そんなこと私が知るか。

それがわかればこっちもこんな悩むほど苦労しないのに

アーディアルトの告白にリーシャは彼が命の恩人に対するある意味吊り橋効果と取り、それを奴に説いて我に変えさせるか、そんなこと知らんとばかりに冷たくあしらうべきかどうか悩んでいた。

告白されるという人生でも大きなラヴィイベントが発生してしまい思わずテンパってしまったが、よくよく後から冷静になって考えれば、男が命からがら逃げてきてそこを女に助けられ介抱されるというシチュエーションができた時点で男が女に惚れるというのはその時点でもう王道だ。フラグがビンビンだ。

それはよくあること。

だがしかし、怪我が癒え、己の本来のいるべき所に帰りしばらくすれば情熱的だが一時的な想いも冷めるもの。

リーシャはこの手の運命だとかをあまり信じていない。いや、まったく信じていない

そんなもの。二次元だけでしか起こらない現象だ。リアルだったらお世話になった人に後日菓子折りとか手紙とか送るくらいなものだ。

「あんなゲロ甘な台詞恥ずかしげもなくサラッと言っちゃってさ、なんだよ、明らか女なれしてるって感じだし！ リーシャ、あんな奴に惑わされないでね。絶対に騙す気だよ。リーシャが性格にあわ

ず実は初心なのを見透かしてるんだよあいつ！」

「うっさい。だれが初心だ。キスって言葉口にするだけで顔真っ赤にさせる奴に言われたくない。」

アーディアルトにリーシャが騙されると思ったのか、ルクは今までないくらい必死になっている。

母親兼友人を取られたくないのか？

尋常じゃない焦りぶりに、リーシャはちよつと首をかしげる

ルクはリーシャが魔女になってから初めて生まれたヴィートルの精霊だ。

精霊とは元々自然の木々や草花が持つ生命力に魔女が魔力を注いでやることで生まれる存在で、背中に小さな透明な飴細工のような羽を生やしいかにもファンタジーな姿をしている。

それぞれ生まれた物から属性が決まり、小川の流れから生まれた精霊ならば水属性、炎の揺らめきから生まれた精霊は火炎属性となる。ルクは木々の若葉の新芽から生まれてきたので植物属性だ。

精霊——精霊に限らずヴィートルすべてのものもだが、月神への信仰心が厚いのでその半身といえる魔女への信頼の念もまた厚い。しかもルクはリーシャによって初めて生み出された精霊であるから、リーシャに対する想いもひとしおだし、信頼以前に友情と呼べるようなものも築き上げていた。

彼にとってリーシャは母親とも呼んでもおかしくはない。だが日ごろの彼との関係を見れば、母親というより友情というほうがまだしっくりくる。

「……ていうかルク。あんた 見てたのね？」

言葉をさえぎり、氷のように氷点下まで落された声色を発したらルクはしまった！ と口を押さえ、そしてヒイイッ と声にならない悲鳴を上げた。

いくら友とはいえ、人がキスをしているところを見られたくはなかった。

「だ、だって、僕の存在を途中からすっかり忘れてあいつに構いはなしだったのはリーシャじゃないか！！それに、僕がリーシャの言葉なしには勝手にその場から消えられないの知ってるだろう？」

子供のような反論をするルクにリーシャは憮然としながらもそういえばそうだったかと思ひ出す

リーシャが来いと念じればすぐさま現れ、去れと言えはすぐに消える。

ヴィートルの者たちは皆そうだ。

冷たい主従関係のように見えるが、その中でもリーシャは彼らに愛情はちゃんと注いでいるしヴィートルの者たちもそれを充分に理解している。

だがその行動はいちいちリーシャが命じなければいけないようで、うっかり帰っていいよというのを忘れるといつまでもそこに直立不動で立って待っているのだ。

そんな気遣いはいらないとどんなに言っても聞かないし、もう半分諦めていたのだがこんなところで思わぬ事故トラブルがあつたとは。

確かにそれならルクに命ずるを忘れてしまった私が悪い。

いくら友人とはいえ、精霊の本能としてリーシャの命令に逆らえないのだから。

しかしそれでも人のキスを精霊とはいえ誰かに見られていたのかと思うといささか気分が悪い。

「じゃあルク。あんたしばらく呼ばないから来なくていいよ。」

ちょっと恥ずかしくてしばらくあんたの顔が見れないわ

は？ とルクがさらりと言われたことを理解できず呆然としている間に他の精霊が時間が来たと知らせにきた

「リーシャさま、お時間です。」

「ん、今行く。」

時刻は真夜中2時を過ぎたころ

満月が頭上に白く輝き、時が満ちたことをこちらに知らせている。
傍らで固まっている精霊を無視し、リーシャは枝の上に立ち上がった。

「さて、行きますか。」

伸びをしそう言って、聖樹の葉で綺麗に織り上げた鶴を、そつと今頃服を乾かしているであろう奴に向かって飛ばし、リーシャは聖樹の頂上を目指して枝を蹴って登って行った。

折り紙ってなにも正方形の紙でしかできないわけじゃないんです。(後書き)

お久しぶりです。2週間更新できないとかほざいてたら1カ月も更新できませんでした(汗)

作者は学生なのでテストとか行事とか重なっちゃってなかなか更新できなかったんですorz(って言い訳にならない言い訳をする)

：ごめんなさい。次からはもっとうpsピード上げられるように頑張ります！

今回アーディアルト殿下ほとんど出てきませんでした、次回はがつつり出てきますんで。待っててください~い

：最初はこんな殿下ことする人じゃなかったはずなのに、いつのまに暴走したのやらww

こっちの世界に鶴はいない。でも意味はある 上 side 殿下（前書き）

今回めっちゃ短いです もうサブタイトル…

こっちの世界に鶴はいない。でも意味はある 上 side殿下

可愛い なんて可愛いんだ。

全身ずぶ濡れになった状態だがそんなこと気にもせず、アーディアルトはにやけた笑みが止まらなかった。

今から数刻前、リーシャから説明を受けた後、彼女は 『じゃあ私、これから夜の仕事があるから。』 といってさっさとどこかへ消えてしまった。

己の半身とも呼べる愛しい存在に出会った今、片時でさえ離れがた

いのに。彼女はあっさりとアーディアルトの腕の中からすり抜けていってしまう。

「あー。この服着替えないとなあ。さすがに血まみれでみなさんを送り出すわけにはいかないし…」

そんなことをぶつぶつと呟きながらリーシャは一回家に帰ろうと言って転移魔法をしてそこから消えた。

その間、彼女は一度もアーディアルトのほうを振り返らなかった。

もう頭が完全に彼から魔女としての役目へと切り替わったのだ

自分と彼女の感情の温度差に、アーディアルトは無性に齒がゆくなつた。

どこにもいくな

俺だけを見ている

出逢ったばかりなのにアーディアルトにはすでに独占欲が溢れかえっていた。

彼女への想いは逢った瞬間から突如として膨れ上がり、今でははちきれんばかりの勢いだ。

もう俺はお前のことしか見れないんだ。

この腕でお前を抱きしめたい

触れたい キスしたい 俺の手でお前を喘がせたい その魅
惑的な声を聞かせてくれ

いつもの魔力も万全な状態なら魔法でこの腕の中に閉じ込められる
のに、今は胸糞悪いパンゲアの魔術師たちから受けた呪いの影響で
魔力を極限まで吸い取られてしまっているからそれができない。

いや、リーシャはヴィートルの魔女で結界魔法も使えるほどだから
アーディアルトの魔法も効かないかもしれない。

しかしこの腕から逃れた彼女を追いかけてようにも、魔力だけでなく
体力や気力その他もろもろがその時のアーディアルトには限りなく
欠如していた。

それでもリーシャに追いつくつもりとして乗り出した身体は気づけば
地面に倒れ伏していて、そのまま意識も闇の中に堕ちて行っていた
のだ。

それで意識を取り戻したのがついさっき。

うつ伏せに倒れこんでいたはずなのにアーディアルトはなぜか仰向けに、葉っぱを集めて作られたベッドの上に寝かされていた。

ふと周りを見回すと、小さな背中に羽を生やした小人のようなものが彼の周りをうろついて葉っぱを懸命に集めていた。

「……なにをしている。」

ぽかんとして、訪ねると小人もどきはいかにも嫌そうな顔をしてこちらに向けてきた。

「リーシャさまがお前の世話をしろというので。死んだように眠りこけていたので移動させました。」

淡々と語る小人はそれだけ言うとすぐにまた自分の作業へ戻っていく。

どうやら彼はリーシャの知り合いらしいが、彼女を様付けしているということは魔女付きの召使かなにかだろうか。

主人と同じく、どこかへ消えていくその背中を見送りながら、アーディアルトは倒れる前に比べ、多少は魔力も戻ってきていて、魔力の消費が少ない魔法ならできるほど回復していることにきづいた。

明らかに回復スピードが速い

それほどこの島が魔力で溢れているという証拠だ。

そこでふと、アーディアルトは気絶する前にリーシャが言っていたことを思い出す。

ニタァ…… と笑みが広がる

「俺が汚してしまったんだ。責任もって、洗わせてもらおう。」

これが原因で、彼はリーシャに変態認定されてしまうことになる。

こっちの世界に鶴はいない。でも意味はある 上 side殿下（後書き）

一発書き投稿なので意味不明な部分は見逃して！ 焦って書き上げたのでいろいろおかしいよ！

某音ゲーが発売されたので夢中になってやりこんでました（わかる人にはわかるはず）

この土日すべての時間をそのdiv○に費やしてたらいつのまにかこっちの時間が取れてなかったんですww

ゲームって時間忘れるよねw

殿下sideを書いてみました。上下編になりますので本編はもちよっと先になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4111w/>

太陽はお月さまに恋をする

2011年11月14日15時04分発行